

フロム自我論における自我の能動的行為編成機能と、心的エネルギー
額賀 京介（一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程）

エーリッヒ・フロムは、戦前のフランクフルト社会研究所の研究成果である『権威と家族』において「心理学篇」（邦題『権威と家族』）を担当している。ここでフロムは、フロイトの自我理論を踏襲しつつも、独自の理論展開を行っている。フロイトの自我理論では、自我(Ich, ego)は外界の影響を知覚認識し無意識を抑圧する精神器官と把握される。これに対しフロムは、自我は単なる認識機能に収まるのではなく、能動的に外界を改変する時にとりわけ発達するとする。言いかえるなら自我は自発的な行為編成機能なのである。しかし、この概念定義はなぜ可能なのか。本報告ではこの概念定義の理論的諸前提、および理論展開の意義を考察する。

この二人の自我理論に関する差異を考察するうえで、本報告で着目するのが神経学的影響を受けたフロイトのリビドー論と、このリビドー論に批判的に対峙したフロムの心的エネルギー論である。フロイトのリビドー論では、個体は緊張なき状態を目指すこととされ、外界からの影響はすべての不快なものとしてされる。そして個体内部と外部からの神経刺激は、外部へと放出される（これが快楽原則である）。フロイトの自我理論では外界は刺激の源泉であり、そして放出先にすぎず、自己とは消極的な関係しか持たない。

これに対し、フロムは（マルクスの影響から）人間存在の確証性において外界の必要性を強調し、人間と外界との積極的な関係性を想定する。この積極的関係論を内包するのが心的エネルギー論である。この心的エネルギー論は外界を単なる不快な刺激源泉としてのみ把握するのではない。心的エネルギーは自己に対する客観的存在拘束性、また外界と自己意識、心的機制との力動的連関を概念的に表しているのである。

本報告で議論しなければならない一つ点は、この心的エネルギーは実質的にいかなるものなのかということである。この点は、フロムが諸著作の中で取りあげている人間存在の諸特徴との連関で議論することが可能である。これらの諸特徴は、自己意識、象徴、行為、行為者としての人間存在、労働、物質代謝における労働の媒介等である。自己意識は心的領域に当たり、象徴は心理を構成し表出する。行為、労働は、人間の意識的側面と外的世界との媒介と結合にあたる性質のものである。そして物質代謝は人間生存にとって必須不可欠なものである。これは言い換えるなら客観的因果連関と言い換え可能である。端的にいえばこの自己意識、象徴、行為、物質代謝の複合的交流によって心的エネルギーが構成されるのである。

最後に本報告で議論される自我の自発性と心的エネルギー論はいかなる意義があるのか。端的に言うなれば不在の現実の構想と創造である。自我が、自発性を持ち行為の編成機能を持つことは、社会批判だけに収まるのではなく、自由な意識性の下その現実の変革を担うことが潜在的に可能なのである。さらに心的エネルギーは、その自発的な行為創出の源泉、あるいは潜在的な力能として存在しているのである。